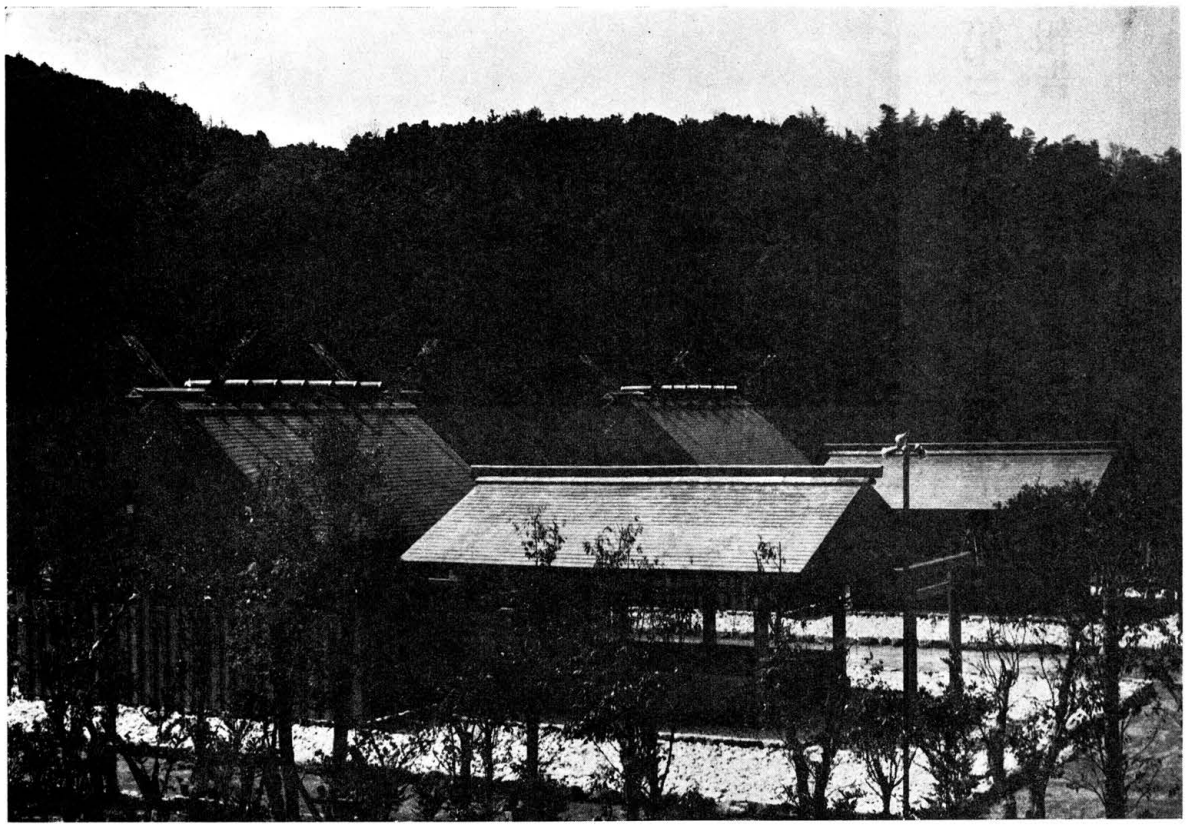
宗像

毎月一日発行
発行所
宗像大社
宗像会
福岡県宗像郡玄海町
電話玄海代④1311
定価一年送料共1000円

神具、装束
結婚式場用品
株式会社 井筒
九州店 福岡市吉塚一丁目三番号(〒一二〇)
電話福岡(九)六一五—九四五六番
本社 京都市下京区油小路六条北入(〒六〇〇)
電話京都(〇七五)三四一—三三二一(代)—四番
三五一—三三四・六〇六番

第二宮・第三宮遷座祭斎行さる



第二宮・第三宮の全景写真

遷座の概略

宗像大社第二宮・第三宮新殿遷座諸祭儀は、樹々の新緑匂う五月十八日より二十一日までの四日間に亘って厳粛且つ盛大に斎行された。十八日、午前九時浄清の儀が神職六名によって奉仕された。

第二宮・第三宮新殿の御扉が重々しく開かれ、純白の浄衣に威儀を正した神職が新殿の御内陣、大床を次々と洗清めた。

翌十九日、午前九時清祓いが執りおこなわれた。第二宮幣舎内に設けられた斎所に於て、大祓詞が奉唱され、神の大麻、塩湯で第二宮、第三宮新殿をはじめ幣舎、境内、遷御道が隈い清められた。引続いて午前十一時、拝殿に於て御神刀奉納式がおこなわれ、宗像大社復興期成会長出光佐三氏より新殿二宮へ大刀二振が奉献された。この大刀は人間国宝月山貞一氏が誠心込めて鍛造された逸品である。同午後一時から清明殿に於て御装束神宝読合の儀が行われた。

この度の第二宮、第三宮新殿に奉献さるべく数々の神宝が復興期成会により奉製され、これら神宝が唐櫃に納められて清明殿に据え置かれた。先ず復興期成会長より神職が送文を受けて、これを読み上げ、宮司がこれを奉検して異状なきを確認し、復興期成会長にその旨を伝えて式を終了した。

宗像山後背の空が茜色に染まり神域が墨絵の様に暮れなずむ頃、遷座の儀を明日に控えて、奉仕する全奉仕員が正装して斎館前庭に列立した。この後境内東側御前浜に殿けられた斎所に参進し、遷座の御列に使用される威儀神宝を始め奉仕員全員が被え行なった。川原の大被である。この後午後七時からは、遷座の儀の習礼(祭典練習)がおこなわれた。この度の遷座祭は、第二宮、第三宮二殿のため、境内第三宮に先ず第二宮御神璽をお遷し申し上げ、第三宮に於て祭儀を斎行し、二殿の御神璽を御羽車二台に御動座し、新殿に奉遷申し上げる次第になっている。

このため全奉仕員は遺漏なきを期して熱心に習熟に努めた翌二十日午前九時、第二宮、第三宮境内には五色の高幕がひるがえり、御飾りの儀が行われた。

曇っていた空模様も昼過ぎには晴れ、雲間から陽光が射し夕刻には五月晴れとなり、当初から雨天は有り得ないと確心して準備を進めてきた関係者を喜ばせた。

辺津宮神宗備が夕闇に包まれた午後八時、斎館の大太鼓がとうとうと鳴り渡り、此の日の盛儀に奉仕する全員が斎館前庭に整列、一礼の後或舎へ参進し被えを受けた。これ等奉仕員が神門をくぐり第三宮前の所定の位置に着座すると、神門が閉じられ、静寂な境内には篝火の音が一際高く響きわたった。

第三宮神前に於てやがて葦津宮司の祝詞奏上に続き、召立文が読み上げられる。召立とはこの遷御の儀の役割と氏名とを指名することで、奉仕員は召立の度にオーと応えて夫々の役割に著くのである。やがて松明に火が点ぜられ遷御の列次が組まれる。御羽車に御神璽が御動座になると境内の明りが一斉に消された。松明の明りが御列をくっきりと浮き上がらせる雅楽の音につれて遷御の御列は古殿から新殿へ向ったのである。

神門前、清明殿前には奉拝席が設けられ、この盛儀を拝さんものと夕刻から待った人々が両掌を合わせる。やがて御列は新殿に到着神璽が本殿奥へ奉遷されると境内の灯りが一斉に点灯された。

神宝の召立に続いて、葦津宮司の祝詞奏上、参列者代表の玉串拝礼に合わせて多数の敬虔な拍手が鳴り渡り、ここに宿願の第二宮、第三宮遷宮遷座の儀は滞りなく終了したのである。

満天に星がきらめき、新殿二宮の千木が黒い影を曳いて天空に融け込むかのようにそびえている。翌二十一日、早朝から快晴。午前十時奉祝祭、第二宮、第三宮前庭は参列者で満席となった。

定刻、神職、舞奉仕者が参進、第二宮、第三宮に分れて着座、神饌が奉られ、祝詞が両殿で奏上され補女舞、風俗舞が両殿の間に設けられた舞台で奉げられた。この後両殿に夫々多数の玉串が奉られて大祭は終了した。

奉祝祭挨拶

宗像祭祀をますます盛んに

宗像大社宮司　葦津嘉之

昨夜午後八時にこぼれるような星空の下で無事御遷座を終りましたことを、まず最初に御報告申し上げます。

顧みますと、昭和十七年に宗像大社復興期成会が結成されて以来三十数年を経過しました。その間、昭和十七年には、帝国議会に国費御造営の陳情がなされたのをはじめ、『宗像神社史』上下、附巻の編纂、また数次にわたる沖ノ島の学術調査、宝物館の建設。昭和四十六年には、昭和の大造営を行ない、今度その最終事業であります第二宮、第三宮の御造営を了えました。またその間には、歴代の宮司が六代替りましたが、復興期成会々長の出光佐三氏には、今日まで最初の志を全うされまして、本日最終事業を終えられるわけでございます。

誰でも、いろいろ志をたてるのでありますが、それを最後まで全うすることは非常に難かしいことです。

この第二宮、第三宮の御造営につきましては、伊勢の神宮から特別の御配慮を頂きまして、皇太神宮の別宮でございます伊佐奈岐宮、伊佐奈弥宮の二宮のご殿を頂戴致しまして再建いたしたのであります。この席をお借りしまして神宮をはじめ関係の皆様方に厚く御礼を申しあげる次第であります。

この第二宮、第三宮と申しますのは、非常に聞きなれない名前と思いますが、簡単に説明いたします。

沖ノ島の沖津宮に鎮座されます田心姫命(たごりひめのみこと)、大島の中津宮、ここには湍津姫命(たきつひめのみこと)、それに田島の辺津宮には市杵島姫命(いちきしまひめのみこと)の三柱の神様がお祀り申しあげてあります。

そして、現在の辺津宮を総社第一宮と申しあげております。第二宮、第三宮、第三宮と書きまして、てい一宮、てい二宮、てい三宮と称しております。このようなご関係で三柱の神様がいらっしゃいますので、当然お社が三つあったわけです。

ところが今から、四百年ほど前、宗像氏真の時代にお社がなくなりましてから今日に及んだ次第です。

昔、建っておりました場所は、現在のお社とややずれておりますが、大凡この場所に、古図をみますと建っております。

そういうことで、この三柱の定位置に三つのお社が完全に揃うまでは、宗像大社のご造営は終ったことにはなりません。長い年月をかけて、今日無事でき上ったというわけでございます。

復興期成会々長のお話を伺いますと、「これで、私の人生のすべての仕事が終った。これから先は、私は、宗像の氏子なので毎年お米を一升づつお供えしますから、どうぞ、皆様とご一緒にお仲間入りをさせてもらいたい。」と、いうようなことを昨夜おっしゃっておられました。

私たち、神職といたしましては、これで、すべての祭祀の設備が整ったわけですので、天照大神様からいただきました神勅の精神に基づいて、ますます宗像祭祀というものを盛んにしていきたいと考えておる次第でございます。

そういう意味におきまして、これから、ますます、皆様方のご協賛をお願いしまして、簡単でございますが、宮司の御挨拶にかえさせていただきます。

どうも、ありがとうございました。

御神徳の尊さ

宗像大社復興期成会々長　出光佐三

このたび、第二宮、第三宮の御遷座が行なわれました。天候といい、すべての行事といい、これほど順調に運んだことはないと思います。これは、全く、御神徳のしかしむところと感激しているしだいでございます。

皆様の不断の御後援、御支援に対して厚く御礼を申し上げます。

この両宮は、伊勢神宮の伊佐奈岐命・伊佐奈弥命御殿を範して御造営したという、まことに御神縁ただならぬ尊いお社ができたということでございます。

この点、伊勢神宮御当局並びに神社本庁のご配慮に対して厚くお礼を申し上げるしだいです。

近年、日本で「永遠の日本」という言葉が開かれるようになり、世界各国でも、日本を「永遠の日本」といいならわしております。

このことは、二千六百年の日本ということです。外国に例をとると御承知の如く、英国は六百年くらいで、あとは三百年くらいで国の中心が代っています。三百年しか続いていないというのが世界各国の例であります。日本は二千六百年続いている。これを「永遠の日本」といっているわけでございます。この「永遠の日本」は、これからも五千年あるいは一万年続くということであり、そういうことが、世界的にいわれている時に、この御遷座があったということは、非常に御神慮の尊さを感じるわけでございます。

この第二宮、第三宮の御神徳によって、「永遠の日本」が一層力強く進められ、日本が繁栄する、そして世界の為に尽くすことを深く感じているわけでございます。皆様と共に、今日の御遷座の尊さに対してお喜びを申し上げるとともに、今後の国民としての覚悟を強めなければならないと思うのであります。

第二宮・第三宮御復興事業完成

経過報告

復興期成会事務局長　内田　澄

宗像大社第二宮、第三宮御復興造営事業と、これに伴う関連諸工事の経過を御報告申し上げます。

先程、復興期成会々長と宮司の御挨拶ありました通り、第二宮、第三宮の御社殿は、先に行われました第六十回神宮式年遷宮に際し御下付いたゞきました皇大神宮別宮、伊佐奈岐宮、伊佐奈弥宮両宮の古殿を以て御造営されたものでございます。この度の両宮御下付につきましては、特に神宮御当局の格別の御高配により、異例ともいうべき三宮の御下付を賜り、関係者一同の感激これに過ぐるものはなく、深く感謝申し上げている次第でございます。

御承知の通り、御造営成りました第二宮、第三宮の御神域は、約三千坪に及ぶ旧田島小学校の敷地で地鎮祭並びに起工式を行い、造営工事は愈々本格化するに至りました。秋冷の十月十日、遂く伊勢の地では、皇大神宮別宮伊佐奈岐宮、伊佐奈弥宮、両宮の御遷宮が斎行され、新宮への遷御が恙なく終りましたので、十月二十一日支店の真心こもった御協力により御当局の格別の御高配により、異例ともいうべき三宮の御下付を賜り、関係者一同の感激これに過ぐるものはなく、深く感謝申し上げている次第でございます。

御承知の通り、御造営成りました第二宮、第三宮の御神域は、約三千坪に及ぶ旧田島小学校の敷地で地鎮祭並びに起工式を行い、造営工事は愈々本格化するに至りました。秋冷の十月十日、遂く伊勢の地では、皇大神宮別宮伊佐奈岐宮、伊佐奈弥宮、両宮の御遷宮が斎行され、新宮への遷御が恙なく終りましたので、十月二十一日より三十一日までの間、両宮古殿の解体作業を行いました。

解体作業には、この度御社殿の建設工事を担当されました地元宗像町の弘正組社長中野弘憲氏以下十名の棟梁が伊勢に赴き、御手伝の奉仕をすると共に、併せて、神宮営繕部の方々の懇切なる御指導の下に、再建の技法を具さに習得して参りました。解体の終えました総量百石の御用材は、完璧の養生を施し、日本通運株式会社九州支店の真心こもった御協力により十一月七日無事ご宗像の地に到着致しました。一方、崛舎、瑞垣、鳥居の御用材につきましては、関係者が直接台湾に赴き、上質の台檜材約百三十石を購入し、本年正月明けを待って、当地に搬入して、直ちに切り込みを開始しました。

厳寒の二月十日、吉日を卜して御社殿の立柱祭、上棟祭が併せ行われ、「千歳棟」「万歳棟」の掛声が神苑に木魂し、関係業者の卓越せる技術と、真心からなる御奉仕により工事は、予定通り順調な進捗を遂げ、四月末日には、全工事を完了し、去る五月七日目出度く新殿祭を斎行し、ここに無事、その竣工を見るに至りました。

御営造になりました第二宮、第三宮の御社殿は、我が国最古の神社建築様式の神明造りでございます。たゞ屋根だけは御覧の通り、銅板葺としておりますが、本来の萱葺きを型取り、丸いふくらみをもたせ別宮の御屋根の姿に葺き上げられております。

こうして、お伊勢さまの佇いを、ここ宗像の地に再現出来ましたことは、誠に御神縁営ならぬことは申せ、関係者一同の大きな喜びであり、また誇りに存ずる次第でございます。

この御造営完成により、第一宮であります御本殿を中心として、三宮一体の宗像祭祀が、ここ内陸の辺津宮境域に於きまして、往時に倣ひ荘厳に執り行われます。

この第二宮、第三宮の御造営費は、社殿建設、植栽造園、その他総額約一億二千六百万円でございます。

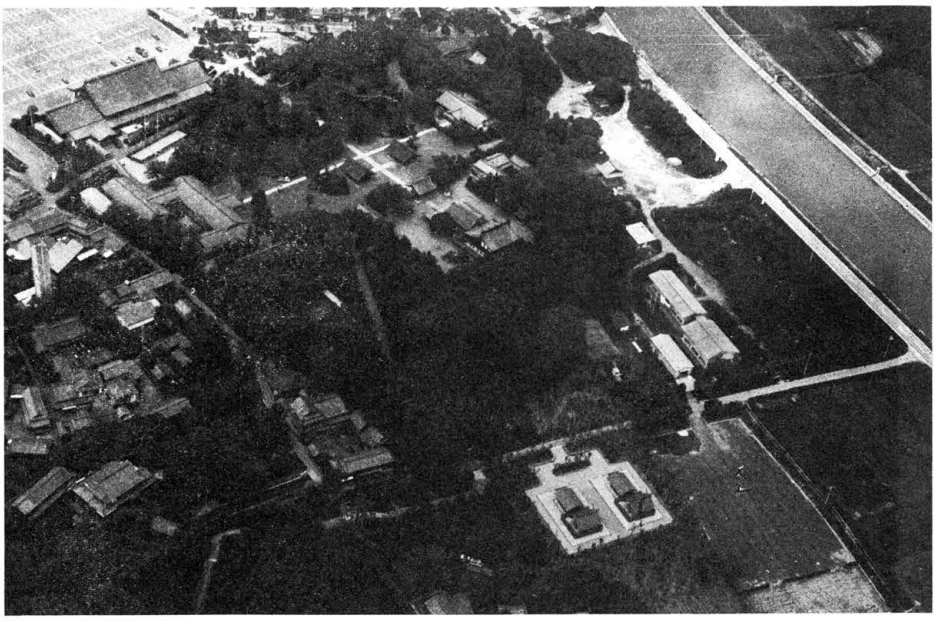
次に、第二宮、第三宮の御造営と併行して行いました高宮参道陸橋工事について御説明申し上げます。皆様御承知のとおり、高宮は悠遠のいにしえ、宗像大神御降臨の地と伝えられ、辺津宮御社殿が創建されるまでは、この地で永く祭祀が行われておりました極めて由緒ある聖地でございます。更に高宮は、原初神道の祭祀形態を現今に伝える全国でも極めて数少い神籬磐境形式の古代祭場であり、現在も此処で連綿としてお祭りが続けられております。

当復興期成会では、戦後逸速く高宮の復興造営に着手し、昭和三十年には祭場の整備、周辺用地の取得及び参道の建設を行い、更に、去る昭和四十六年には大造営事業の一環として、既設の参道と辺津宮境内間の整備連結を終え、高宮参道の造築を致しました。しかし乍ら、この参道はその道筋一ケ所の地点に於て、それぞれ町道と私道とに交叉していましたので、参進の途中、しばしば人馬、車輌等に進行を遮ぎられ、このため著しく祭儀の荘厳さが損れ、更には、交通事故の危険性も憂慮される状態でありました。

当復興期成会では、これらの障害を解決すべく種々検討を重ねて参りましたが、この度、私道につきましては、所有者の「御ノブ様」と、参道沿ひにお住いの「吉田種夫様」の格別の御協力により、また、町道につきましては、玄海町御当局及び地元住民の皆様の御了承を得て、この町道上に、高さ三・五米、幅三米、長さ五米のコンクリート陸橋を架け、この地点を立体交叉とすることにより、その解決を見るに至りました。この工事は、内山緑地建設株式会社において施工され、自然石による石段と、周辺の植栽により美事に完成致しました。

当陸橋建設により、高宮参道は参道本来の姿であります清浄な雰囲気に包まれ、第二宮、第三宮の御造営と相俟って、当大社の森厳さが一層高められました。この高宮参道陸橋工事に伴う工事費は、総額約二千三百万円でございます。次に、沖津宮社務所建設工事について御説明申し上げます。

沖津宮社務所は、古くからありました社務所が、昭和二十年に火災により焼失し、その後は一時福岡県の沖ノ島漁船難築港工事の工作事務所の一隅に、仮の社務所を設け、更に、最近は七坪程のプレハブ一棟を建設して、社務所としておりましたが、沖ノ島の自然環境は極めて厳しく、強風や塩害等のため、この建物も老朽化が甚だしく、日常の奉仕生活に不便を来たしている状態でございました。加へて、昭和四十八年春には、沖ノ島灯台が無人化して、灯台職員が引揚げられ、その後は、島に常駐する者は神職一名だけとなり、社務所の建設が切望されていましたが、この度、漸くその実

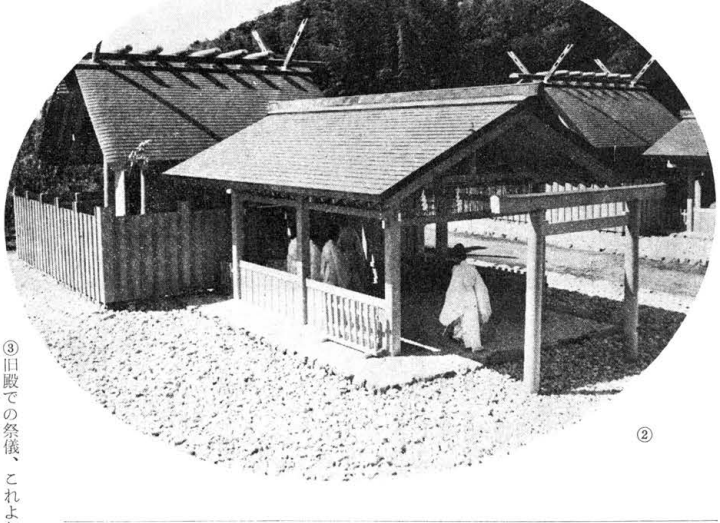


①

写真説明

①復興なった神域をのぞむ

②新殿祭、神殿が完成したことを奉謝する儀式である。



②

宗像大社

第二宮・第三宮遷座祭記念

―遷座神韻―

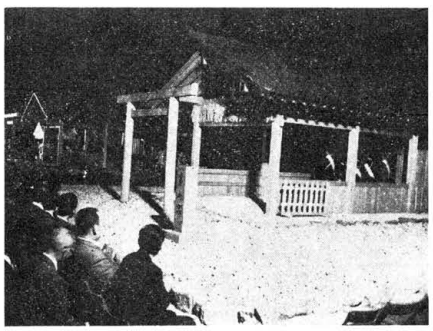
仰木　実

月澄みて清くかがやく玉砂利を神かよふらし禰宜らおごそか

照る月の光あまねき宗像に天降りたまひし遷座鎮もる

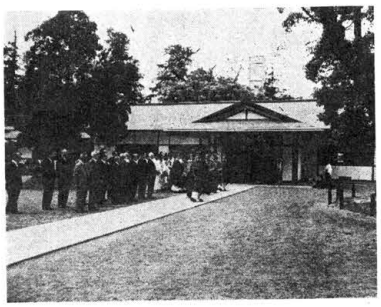
千木高く宮居鎮もる今朝の苑今の世の幸天にてりあふ

③旧殿での祭儀、これより御扉が開かれる。



④第二宮御神璽奉安をおえ

⑤奉祝祭で玉串拝礼を行う復興期成会長



⑥奉祝祭へ参進する祭員

現をみるに至りました。

新社務所の設計は、東京住宅の伊藤要太郎氏に依頼し、施工は、大島在住の棟梁、藤田幸利氏により、又、水道工事は、地元宗像町の伊藤鉄工所により行われました。建坪は、約二十坪、屋内は潔斎場、応接室、和室二間、食堂等で、屋根は塩害を考慮して、ステンレス葺きになっております。

申すまでもなく、沖ノ島は、神の島であり、全島、国の史蹟に指定されています貴重な所であります。この島を守り、古代より連綿として続けられて参りました国家鎮護、皇室守護の祭祀を厳修し、これを後世に伝えていくことは、神社並びに崇敬者の重大な使命であります。

この度、本格的な社務所の建設を見ましたことは、誠に意義あることゝ存ずる次第でございます。

この沖津宮社務所建設工事費は、総額約二千六百万円でございました。

終りに、沖津宮遥拝所修復工事について御説明申し上げます。

沖津宮遥拝所は、大島の岩礁に建てられている建物で、ここから遥かに「玄界灘の孤島」沖ノ島に鎮座ましますの沖津宮を拝み奉る施設でございます。

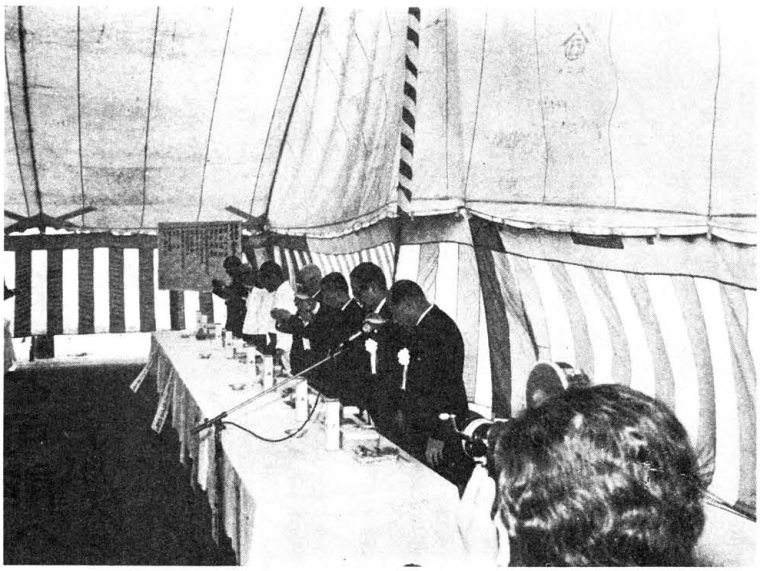
現在の遥拝所は、明治、大正と再三の修改築を経て、昭和八年に改築されたものであり、更に、戦後修復が行なわれましたが、近年は、雨漏りや、壁のゞ落等、損傷の状態が甚だしく、大修理の要に迫られておりましたので、この度、関連工事として、御修復を行いました。

昨年三月、弘江組により工事に着手、九月に完了致しました。屋根はすべて銅板葺きに改め、傷んだ木部は、取替修理を行い、壁も数回に亘り丹念に塗り込み、最後に白漆喰で鮮やかに塗り上げられました。御修復を終えました遥拝所は、海辺にのぞむ景勝の地に、一きわ荘厳な佇いをみせております。この沖津宮遥拝所修復工事費は、総額約六百万円でございました。以上、この度の第二宮、第三宮御復興造営事業とこれに伴う関連諸工事の経過を御報告申し上げましたが、昭和十七年の発足以来、当復興期成会の念願であります宗像大社の御復興は、この度の御造営完成により、略その目的を達成致しました。この間、当期成会に御協賛、御尽力賜りました御関係の皆様方に、本席を借りまして、厚く御礼申し上げます。

以上をもちまして、事業経過の御報告を終ります。有難うございました。

☆　☆

☆　☆



①

遷座祭を祝う

神宮大宮司　徳川宗敬

宗像大社第二宮、第三宮のご遷座奉祝祭が御斎行されましたにあたり、お祝いのご挨拶を申し述べたいと存じます。

ご当社の復興事業は、昭和十七年に計画されたと承っております。限来三十有余年に亘って復興期成会を中心に募財活動が進められ、昭和四十四年に念願の復興工事に着手、そして御本殿解体修復をはじめ斎館、勅使館、祈願殿など諸施設の新築、域は修改築、更には境内地の整備が着々と進み、同四十六年十一月に本殿遷座祭が、又今ここに第二宮、第三宮の遷座祭が盛大に且つ厳粛のうちに執り行われましたことは慶祝に堪えません。

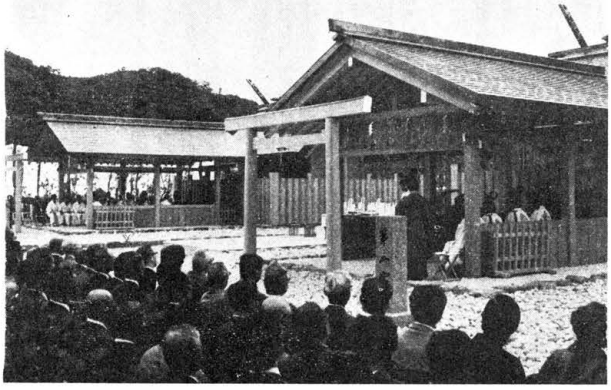
謹んでお慶び申し上げますと共にこれ偏えに葦津宮司様をはじめ神社関係者名位、並に出光期成会長を始めとする氏子崇敬者の方々の敬神の誠心を捧げられた賜物と心から敬意を表する次第であります。

本年は畏くも今上陛下御即位五十年という我国有史以来の大慶の年であり、又ご当社は古来から皇室の守護神として皇室はもとより全国民から厚い信仰があり、更には既に皆様もご承知でありますように両宮の御用材は、伊勢神宮の別宮で皇祖天照大神の親神がお鎮まりになっておられた伊佐奈岐宮、伊佐奈弥宮の御殿舎であったこと等を合せ考えます時、大神様の尊い御神慮を感ぜざるを得ません。

この様に氏子崇敬者の誠心を捧げて厚いご奉仕によって宗像の森に厳然と鎮まりました神々はさぞかしご嘉納あらせられ、益々御神威輝き給うことでありましょう。

どうか関係各位におかれましては、この奉仕事業に示された敬神尊皇という美わしい日本精神の昇揚に努められ、更に愈々ご神徳の宣揚を期されますことを願ってやみません。

ここにご社頭の隆昌を祈念いたしましてお祝いの言葉といたします。



②

遷座祭に供奉して

宗像大社氏子会長　立石昇

第二宮、第三宮社殿建設の二用材として、皇大神宮別宮である伊佐奈岐宮、伊佐奈弥宮の両殿をそのままご下賜いただくことは異例のことであると、かねて承っていましたが、そのご用材を昨年十一月十日氏子会役員総出でお迎えしましたで。ついで十一月十三日には地鎮祭、今年二月十日には立柱祭・上棟祭が斎行され、四月十八日に伊勢神宮式年遷宮の折執り行われる「お白石持行事」にあやかって、郡内氏子代表四十余名が新殿への敬虔な祈りをこめて、瑞垣内と嶮舎内の小石敷奉仕を行いました。第二宮、第三宮社殿のご造営も完成し、植栽も終り、荘厳な神苑を再現しました。かくして私達が待ちに待った遷座祭が、伊勢神宮大宮司代理を迎えて斎行される佳き日を迎えました。

五月二十日、晩春の日長の一日も漸く暮れなずむ頃、境内参道に、庭燎が赤々と灯され、午後八時、太鼓の音が神苑に高らかに鳴り響くなか、私ども供奉員は今日の光栄を噛みしめこの祭儀に列しました。古式に則り、祭儀が厳かに執り行なわれ、第二宮、第三宮のご神霊が旧殿を出御される時刻には、神域は一斉に滅灯され、庭燎も凡べて消されて浄闇の中、松明のあかりのみが樹林生い茂る遷御道をかすかに照らしています。私ども供奉員はご神霊の後に威儀を正して、黙々として歩を進めました。

遷御の列が、それぞれ第二宮、第三宮の新社殿の幄舎に進み、ご神霊が新殿に鎮座ましまして遷座の儀が終わるまで約二時間を経過していましたが、この間神域は、森厳、静寂、清浄の霊気漂い、神気に打たれたと申しますが、身も心も洗われる想いで神の心に帰一すべく瞑想したのでありました。

明くれば、五月二十一日午前十時から奉祝祭が斎行されました。

浦安舞、風俗舞の奉納もあり、約二時間に亘る大祭典も終りました。前後よりの参列者は、伊勢神宮大宮司代理、復興期成会長をはじめ、役員、氏子総代、奉賛者、神社関係者、官公庁、工事関係者等五百余名、いづれもご遷座の盛儀を慶びご神威の弥栄を心からお祈りいたしました。

新社殿横の境内の一隅に張り巡らされた大テントでの、直会に移り、三々五々打ちつれて、好日和のもと、境内を語り歩く姿は、真に神域に相応しく微笑ましい状景でありました。

茲に昭和四十六年十一月御本殿の御復興につづき、今回、第二宮、第三宮の社殿並に境内地の復興をみて、宏大無辺の神助を顕現できることは、われら氏子として慶祝の情、切なるものがあります。と共に多年に亘る復興事業に情熱を捧げられた出光会長を始め復興期成会役員、神社当局、その他関係者各位の尽力を分たぬ辛労に対し、氏子会を代表して衷心より感謝の意を表します。

今や宗像大社は、復興期成会に依って、往古の荘厳、敬虔なたゝずまいに復元されましたが、出光会長は「昭和十七年以来の念願が叶って、大社も一応の復元を達成しました。今後は氏子の一人として参拝し、愈々信仰を深めたい」と宣言されています。私ども郡内に居住する氏子としても、この心構えを忘れず、明るく清い心を持って神に仕え、ご神徳の宣揚に、神を通しての日本人の道義昂揚に、一層の誠を尽し度いと、誓を新にするものであります。

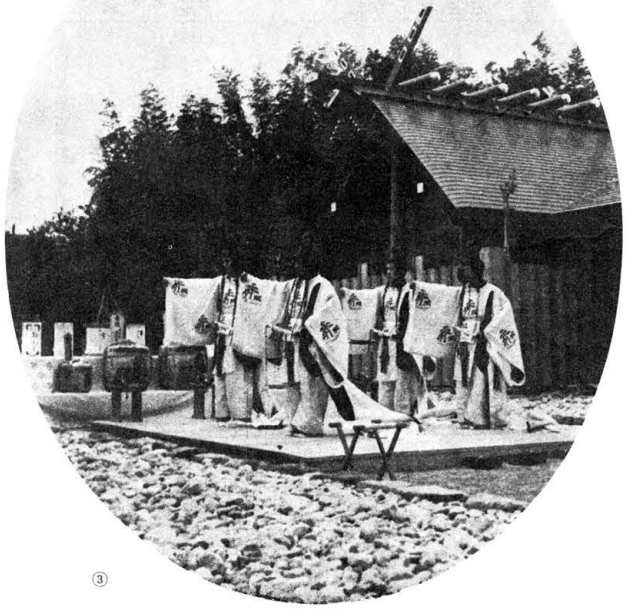
遷座祭に際して

福岡県知事　亀井光

第二・第三両宮の御遷座が自出度く終りまして、奉賛会の三十年を越える永い間の御労苦と、また歴代宮司さんの御心労は、ここに立派に実を結びましたことを、心からお喜び申し上げる次第でございます。これによりまして福岡県の誇りが、また一つ大きく出来ましたことを、県民一同心から喜ぶものでございます。

昭和四十二年知事に就任しました当時、当宮に御参拝をいたしました節、この釣川或は三号線からお当宮まで参ります県道は、実にみじめな状態でございました。先ず私は釣川を改修し道路を改良してゆくことが、この福岡県の誇りである宗像大社の為に、私の尽すべき道であろうということで努力をして参りました結果、一応の成果を挙げて参りました。またこの大社を取り巻きまする神域を、新しい開発によって害しないように、この自然を永久に守ってゆく努力を、今日まで致して参りました。今後共高橋町長と手を取り合い、また周辺の県民の皆様の御協力をいただきながら、この神域を永久に守ってゆく努力を致すことが、私に課せられた大きな責任であろうと、こう感じている次第でございます。

幸い、ここに立派に完成しました大社につきましては、氏子の皆様方のこれからの御奉賛の御努力と、県民全体のこれに対する御協賛を心から念願して、この誇高い宗像大社が、今後共いや栄えに栄えますることを心からお祈りして、一言お祝いの言葉とします。ありがとうございます。



③

写真解説

①奉祝式典、復興事業の完成を祝して

②奉祝祭斎行

⑥風俗舞奉納、田島地区氏子青年奉仕

おしらせ

自然のアルバム（NHK）

八月三日　午前七時十五分より放送

玄界灘の孤島、沖ノ島の厳しい自然条件のなかで生きぬく、動植物の生態を、NHK報道班が当社の許可をえて、去る六月十五日から十日間に亘って取材したものです。

宗像大社歌会 俳句作品集（二四九）

種物屋店頭の花人を寄せ　土穴　八尋　恒夫

素布団に夢つむなり花菖蒲　田熊　力丸　一郎

朝風に強歩運動夏めきぬ　田熊　安部　ゆき

ハ方手の菜大きく結れぬ五月晴れ　田島　有吉　唐水

ハスト明けの紙面の端より梅雨に入る　津屋崎　井浦　良介

おとなりはいつも留守がち若楓いただきし新茶はうまし老二人　福岡市　入江　柳江

西日本新聞社刊・滝口凡夫著

創造と可能への挑戦

―出光佐三の事業理念―

第三章　創業

ひとすじの道

出光商会は明治四十四年六月二十日、門司市（現在の北九州市門司区）東本町一丁目で日本石油の特約店として創業した。ときに佐三は弱冠二十五歳、注目する人とてないひそやかな再出発であった。

店主・出光佐三が生まれた。念願の〝一個独立の商人〟として、これまでの思索と体験から得たものを、実行に移す機会が訪れたのである。

その本拠である店の構えは、当然のことながら小さく見すぼらしかった。

創業まもなく東本町二丁目に移ったが、市内電車の通りに面した木造二階建て、ガラス窓に鉄格子をはめ、正面入り口に『出光商会』と横書きしたしゃちょうの看板がかかっていた。一階が板張りの事務室兼応接室、そのほかは畳敷きの食堂兼寝室、二階が店員の合宿所になっていた。板張りは、歩けばギシギシと音をたてた。

事務室の正面には、水島校長が贈ってくれた墨痕あざやかな『士魂四才』の額がかかっていた。古ぼけた調度品の中で、これだけが異彩を放ち、仰えようもないほどの佐三の心意気を物語っていた。

佐三の創業は、破産してまもない出光一家にとっても、再建をかけた試みだった。父松寿、翁のほか、兄雄平、弟の佳月、泰宗、妹婿の真武周三がそれまでの仕事を捨てかけつけた。ブラジルに渡っていた弟の弘も、まもなく呼び戻された。

このほか従業員は、松寿翁の知人井上庄次郎、事務員、でっちなど五、六人であった。

猛烈な営業活動が始まった。佐三は早朝から夜中まで、先頭に立って働いた。

倉庫から油のタルを出し、カンに詰めかえてハンダづけする。カンを車に積み込み、縄をかける。さすがに『腰がすわらず車は引けなかった』というが、こうした作業のあい間を縫っては、注文をとりに会社、工場をかけずり回った。

販売の主目標は、筑豊炭田である。

佐三は大番頭の井上と手分けして、しらみつぶしに炭鉱を訪ねた。門司を朝一番の汽車でたち、折尾で乗りかえ直方、飯塚、田川と回る。

寒風吹きすさぶ冬には、スチームのない客室で佐三はつこえる足をさすった。もともと冷え症なのである。夏は熱気で焼けつくような線路を、弁当を腰にくくりつけ、片手にトロッコ用車軸油、マシン油の見本ビンを入れたカゴを下げて歩いた。

帰りは夜九時ごろになった。それから帳簿を整理し、油の粘度や引火点を研究し見本油を調合した。

さらに、友人、知人を頼り、八幡製鉄所を初めおよそ機械を使う北九州の工場には、軒なみ足を運んだ。

しかし、油は売れなかった。

もともと、機械油の需要が激減しているのである。おまけに先輩の特約店が、がっちり得意先を握っており、新参の佐三が食い込む余地はほとんどなかった。

おそらく創業当初のこの失敗は、終戦直後のラジオ業などを除けば、佐三が手がけた多くの事業の中で唯一の失敗例だろうが、これによって佐三は『失敗は功のもと』という言いふるされた格言を、身をもって味わうことができた。

『従業員の失敗をとがめるべきではない。失敗の教訓を生かそうとせず、失敗を繰り返すことをとがめるべきである』というのが、佐三の口ぐせとなった。

また、テコでも動かない需要家を攻略するセールスのコツを身につけることができた。人をそらさない座談のうまさも、こうした経験で磨きをかけられたのであろう。

このころ、わが国の漁業は沿岸漁業から近海、遠洋漁業へと、急速に発展しつつあった。日本水産、大洋漁業などの水産資本が、近代的企業形態として形を整え始めていた。

下関で機船トロールの試験操業をしたのが明治三十七年ごろであり、それから三、四年後にはもう本格的な操業に入っていた。下関を基地とする機船底引網は、四十二年の九隻から四十四年には五十隻にふえた。機船さんちゃく網は、大正の初めに七十隻に達していた。主な水産会社だけでも兼商店（大洋漁業の前身）、下関水産、山神組、関門水産、関西漁業などがあった。

大正十一年版『下関統計年表』は述べている。

『近来、市を根拠地とせる漁業発達して、年とともに拡大せられ、いまやその従事せる機船実に五百九十七隻、帆船二百八十三隻、百八十六万九千円、朝鮮各地より生魚移入二千六百六十万円を含む生産高換算千百万円を数ふ』

内燃機関革命が船用から始まったのである。発動機をつけた漁船は燃料油を使う。当然のことだが、佐三はこの新しい分野に着目した。販売の主力を、機械油から燃料油に切りかえたのである。

最大の得意になったのは山神組であった。

山神組の宿舎には、水産講習所（水産大学の前身）を出た若い技術者たちがいた。

なにしろ、夜明けを迎えたばかりの日本漁業である。技術的にも経営的にも、解決しなければならない問題は山積している。若ものたちは、これらと真剣に取り組んでいた。佐三も、しばしば議論に加わった。

そのころ、漁船の燃料油には灯油かガソリンが使われていた。

若ものたちの意見は、かわりに軽油を使ったらどうか、ということであった。燃焼速度も早くて、着火性も良い。性能からいって不都合はなく、値段もぐっと安い。

佐三も同じ意見であった。

しかし、いざ軽油を使うとなると、機関員たちが反対した。

『こんな色のついた油を使ったらエンジンが故障する』『ください、おれは船をおりる』などという。若ものたちはこれを押し切り、とうとう未洗軽油、重油を使うところまで持っていった。

売は軌道に乗った。大正三年ごろには、山神組所属の全漁船と大口需要家の多くを握り、漁船相手では業界のトップクラスに成長していた。

博多にも進出した。遠洋トロールを持った玉ノ浦の漁船団も売り込み、ついで、長崎県の五島、壱岐、対馬、さらには山陰方面へと販路を広げた。大正四年に下関、十年には博多に支店開設している。

しかし、こうした出光の発展は同業者の反発を買った。

漁船向け燃料油に手をつけ始めたころのことである。佐三は親会社の日本石油に呼ばれた。『君のところの販売区域は門司だ。下関は他の特約店のエリアだからやめろ』というのである。

佐三は『相手は漁船だ。海に区域でもあるのか』と例によって理屈をこねた。相手はやりこめられてグーの音も出なかったが、同業者たちは『出光は海賊だ』とカゲぐちをたたき、恐れた。

文字どおり佐三は、海賊のような意気込みで販路を広げ、事業の基盤を固めていった。

店内は若さと活気に満ちていた。

兄雄平、番頭格の井上を除く従業員はすべて二十歳代、弟佳月を始め全員が二階の合宿所に泊った。佐三は月一回は必ず従業員を自宅に招いて店員会議を開き、食事をともにしながら討議し主義、方針を説いた。店員の家族の面倒をよくみた。『人間尊重』『大家族主義』が早くも独得の店風を形成しつつあった。

当時、出光商会で働いていた人たちの談話を集めた社内資料がある。佐三については、こう書いている。

『店主（佐三のこと）はその風貌、おのずから一城の主にふさわしい貫録を備え、いんぎんな物腰の中にも覇気旺盛、闘志満々たる気が、かくれもなくその眉宇にあらわれていた。固く結んだ口もと、鼻深くきらめく眼光、一分のスキさえなく、その落ちついた態度は、白哲長身、無髭の端麗な容姿とあいまって堂々たるものであった。激しい気性が、内にも外にもたえて爆発しなかったのは、その教養の高さによるものであろう』

美文調で英雄ものがたり風の嫌いはあるが、三十歳をすぎたばかり、理想に燃える青年実業家・出光佐三の精悍な風貌は十分にうかがえる。

こうして出光商会が、佐三のいう『恒産』を得て、事業としていおうの安定をみたのは大正五、六年ごろである。仲仕もふえ、正月には盛大に初荷を出せるようになった。大正五年の春には、広島県の宮島に初めての慰安旅行に出かけた。

情緒と感動を表現しよう

人は誰でも詩情を持っている。表現法を或る程度覚えると、心情を表現できる。特に詩情豊かな玄海町に素材が豊かである。この度玄海町教育委員会では、成人（文化）学級を開設された。講師として当社短歌会の講師仰木実氏が指導にあたられ、毎月第四月曜日当社舎館にて開かれている。受講者は今のところ十二名であるが、皆さん熱心に楽しく受講されているので、やがてみごとな作品を発表されることが期待されている。

〔年中行事〕六月の主な行事

春から夏に移る季節の変わり目の月で、太平洋側の高気が次第に発達し、日本列島に沿って気圧の谷ができ、その谷間に低気圧が、通ったり、不連続線が生じたりして雨が降り続くのである。

多湿で高温であるが、気圧の谷間に入ったとき、妙に底冷えすることがあり、打ち身や負傷箇所が痛み出したり、疱瘡が化膿したり、手術後の癒着が思わしくなかったりすることがある、又食中毒が多発するのもこの月である。

細菌の繁殖に最適の気候であるということが出来る。

たまの晴れ間を充分活用し、風通し、家具、食器類の手入れをし、とかく不衛生になりがちな梅雨ごもを無事に過ごすよう心掛けよう。

ちなみに入梅とか梅雨の梅は、ちょうどこのころ梅の実が熟することから出ている。

二十一日前後は夏至（げし）、文字からいえば夏の真盛りというところであり、北半球で昼間が最も長く、夜が短い日でもある。

この日から各地の神社で夏期の祭りが始まるが、大体、その地の気候によって田植えが完了した時期にあたり、農作を祈ることから発している。

山王祭、東京の山王権現、すなわち日枝神社の祭礼、祭日は六月十四日、十五日。慶長年間（一五九六～一六一四）から始まり、延宝九年からは、神田明神（神田祭）と隔年に行われ、子、寅、辰、午、申、戌年には本祭を、他の年には陰祭を行った。

将軍の上覧に供したことから天下祭、御用祭の名があった。祭列には、花車に添えて出した鉾、練物、鬼物等の付祭と、太神楽、曲芸等を主とした雇祭が加わった。

文久二年（一八六二）には将軍の神輿の行列上覧は廃された。十四日は渡初めと称して、練物は山王社に至り、ここで夜を明かし、翌暁から市中を練り歩く。神輿の行列は、現在でも盛時の道筋に準じて渡御があるが、花車、練物は明治十七年以来見られなくなった。

十日前後には入梅がある。これは陽が黄径八十度に達する刻をいう。

当社の祭事

月次祭、一日・十五日

社務日誌抄

〔五月〕

一日　月次祭
二日　玄海灘稚園子供祭
　　防府天満宮敬神婦人部百六十名参拝
五日　五月祭・浜宮祭
六日　第二宮・第三宮新殿祭
七日　沖津宮勤務交代
八日　神道青年会九州大会於熊本市
九日　九州各県神社庁連合会
　　神職総会於熊本市
十二日　沖津宮現地大祭打ち合せ会
十四日　第二宮・第三宮御動座祭
　　KBC放送局「交通安全」取材
十五日　月次祭
　　沖津宮勤務交代
　　定例職員会議
十六日　宗像大宮司氏貞公墓参
　　第二宮・第三宮遷座祭
十七日　第二宮・第三宮遷座祭
　　習礼
十八日　この日より第二宮・第三宮御遷座祭、奉祝祭
　　関係諸祭儀に入る
十九日　洗清　清祓
　　神刀奉納式
　　御装束、神宝読合
　　川原大祓
二十日　御飾　御遷座祭
二十一日　奉祝祭
二十四日　福岡海上保安部ソフトボール親善試合
二十七日　沖津宮現地大祭
三十日　沖津宮勤務交代
　　福井県小浜市神職参拝

〔六月〕

一日　月次祭
二日　会計監査
四日　小田急百貨店副社長他五名参拝
　　県神社庁宗像支部例会、於摩利支神社
五日　筑紫野市老人大学生百名参拝
　　砥鹿神社職員参拝
六日　沖津宮勤務交代
八日　旭興産㈱小野取締役他十六名参拝

第二七回　宗像大社歌会詠草

毎月五日〆切　詠草到着順

朝の間の冷え空気に柿若葉梅の若葉も重く静もる　城南丘　早川　須磨

真夜独りランプ点して経よみし祖父の淋しさ老いてわかりぬ　武丸　原田　リノ

たまゆらを新幹線の窓に見し白梅さやにさ今も顕（た）ちくる　田熊　鷲津かつ代

初麗生迎へし孫が今日三歩あるきしと嫁の電話明るし　武丸　立石ろせ乃

一段と拡張機の声高くなり饗老院の花見終りぬ　戸畑　田中ハツセ

春浅き峡に醒れはやや遅く一番鶏が声ひきて鳴く　八幡西　安川　浄生

若楓日ごもえ立ちて春深し見て見ぬふりの術も知りたり　大井　木原ふさ子

いくばくの餘生か知らね生甲斐に歌道銘趣味に生きなむ　田熊　今村　重刀

よろぼくに出荷終りしこの村の家毎に休めり蜜柑のコンテナ　福間　松尾　豊

庭先の樹を眺めながら縁談の裏きき来し人は帰りぬ　名残　竹原　圓

帰来しつぼめ巣作り始めおり板打ゃりぬ早春の午后　田久　立花　勇雄

廃園の大木にからみ咲く藤の巨平の房ゆらぎけぶらふ　香椎　桜井　ツ子

磯の香の入江に満てるなぎさ辺かもめはやさき虻たててとぶ　鐘崎　村田　四郎

ためらいて持つ一通のあり状差しに充たる便りもやさんとして　東郷　田中　春子

夢の間に新幹線は古都に着く馬酔木（あしび）の匂う奈良公園に　原町　八波　五月

孫抱きて旅行く窓に新緑の萌ゆるが続く高速路　宮田　片山　朝子

たまさかに宗高に来て街ゆけば左右より声かけらるる　福岡市　吉田　信夫

みづくと若葉茂れる神苑の老樹に高く諸鳥の声　田熊　吉田　直志

川幅を拡げるために流水を片寄せながら石垣を積む　宮田　片山　一

散り敷ける春の花の幼きを掃かず見をりぬ淡き紅　宗像　中村　幸

通り雨すぎゆく彼方虹たちて自然の美観眼ほれおり　田熊　力丸　一郎

去年の実をたわゝにつけし檳の木の幹より枝に藤の花咲く　徳重　石松や寿子

現実となるかも知れぬ怯えもち一つの雲避けても云ふ　東郷　藤崎　辰子

中津宮のきさはし高かれと足のはづとも軽し喪あけて　福岡市　梶木　州児

庭の草ぬき居る吾に匂いくる山椒の若葉そっと嗅ぎつつ　武丸　原田まつ代

同窓会の案内つけて寛顔を思い出つゝ其の日を待ちり　津屋崎　占部　由久

さわやかに晴れたる空を悠々と我物顔に舞へる大鳶　田島　吉武　武雄

改札口に引き取りの兵が待ちうけ彼の白の久留米の駅に降り佇つ　田久　小方　実

日曜日祈願の車ひきしめて巫女の呼ぶ声澄みて聞こゆる　深田　中野　節子

癌を病む人に対へば老い夫と今日あるを思ふ　曲　天野トモエ

ひっそりと木陰に一本あまどころ皆下向きに白き花咲く　吉武　白木うめの

雨の日の留守居は侘びし菜漬にて食らへば昼のそれで事足る　宮田　北原　若子

還暦を終りし友等寄合いて年金受給の計算あわれと思ふ　津屋崎　麦野　時雄

六月の上旬迎え大実ぐみ心ざさ熟りて裏庭明るし　津屋崎　内田　久美

鶯の啼きわたる峡の道下だり香れ場水に急ぎてゆくも　小倉北　中村　行利

島の磯つたひゆく夜を扉生林の幾ところにか啼く大水鳥鳥